

# 日本文学における性／交を再考する

——欲望の向く身体——

道下真貴，宮田絵里，岩本知恵

## 【主旨】

「性交」は、異性愛主義を前提とし、生殖を目的とした性器中心主義のもとで考えられてきた。このような「性交」を「正常」とし、そこから逸脱した性のあり方を「倒錯」や「病理」として排除することによって、正常／異常の二項対立は強化されることになる。そしてこの「性」の配置は、男／女のセックス／ジェンダー／セクシュアリティを不均衡なものとして固定化していくものである。

以上のような男女間の「性交」における性の不均衡を暴き出したのがアンドレア・ドウォーキンの『インターコース』（寺沢みずほ訳，青土社，1989年8月）である。通常セックスはプライベートなものであると考えられているが、実は、セックスの「正しさ」や「自然さ」は社会の安定に寄与するように、国家や法、慣習などによって規定されている。その意味においてセックスは社会的なものである。言い換えれば、「性交」を「正常」なものだけに固定化してしまうことは、「性交」を不均衡な社会を是認し強化するものとして捉えることになり、性の多様化を否定することになるのである。ならば反対に、「性交」を単一な関係性としてではなく、多様なものとして見ることで、「性交」から性の不均衡性を剥ぎ取ることが可能になるのではないだろうか。

「正常な」「性交」から排除されていく事項を、「正常」と「異常」の二項対立に縛られずに拾い上げていくことが、本パネルの目的である。異性愛の「正常な」欲望には還元されない欲望の在り方を探っていきたい。

## 富岡多恵子「遠い空」 ——食い違う「性交」の意味——

道下真貴

「遠い空」（『海』1979年5月）は、東北の農村に住む50代半ばの女性、朝乃のところに聾啞者の「男」がやってきて春と秋の数回性交を繰り返すという物語である。初めて男が訪れた時、朝乃は性交を求める男をかわいそうに思って男に応えた。だが男の訪れが繰り返されることにより恐怖を覚えるようになる。そしてある時、男が来たことが急に不快になるのである。朝乃の感情の揺れに注目して考察していく。

朝乃がすんなりと男に応え、それを「正常」だと捉える様子からは、性交を異性愛主義的構造のもと理解している姿が見える。朝乃にとって男が女を求め性交を行うこと、男に応えることは「自然」な行為であり、男が求めるとそれに従ってしまう。朝乃は男女の性交を「正常」な行為として捉えており、その中で生きてきた。

しかし男の訪れが繰り返されると恐怖を覚えるようになる。一つは「拒絶すれば殺されないかという恐怖」であり、一つは「正常な人間」である男が忘れずにやってくることへの恐怖である。朝乃の認識のもとでは、男が性交を求めることは「自然」であり、性交自体は恐怖となりえない。男にとって性交は「必要」に見えるが、二人には何のコミュニケーションもなく、お互いの意志や感情を交差させることがない。朝乃は自分とは違う観念が男にあることは感じとれるが、それを理解できず恐怖する。

また朝乃は、男が「正常な人間」であるからこそ、その男が忘れずにやってくることに恐怖する。「異常」であれば拒絶することは許される。だが「正常」であるがゆえに朝乃は男に応えるしかない。これは「正常」への疑いである。ある日、朝乃は男が来たことが急に不快になる。「自然」だったものは違和感を覚えさせるものとなるが、男の訪れは「永遠」となって感じられてくる。年をとって一度自分からは離れたはずの性交が、繰り返され「永遠」として現れる。年をとろうが「永遠」に女としての「性」から逃れられない。朝乃は異性愛主義的構造を「当然」として捉えていたが、男の訪れにより、その構造に捕らえられていることに気付くのである。「自然」だと片づけられなくなった朝乃は「なぜ」と問いを繰り返す。

一方男にとって、性交は単なる性的欲望の行為ではなく、人と関わっていく手段であった。男にとって朝乃は初めての「友人」であり、単に性的欲望を満たすために朝乃のもとを訪れていたわけではない。男は、性交の社会的意味を身に着けることなく生きてきた。男が初めて性交を知ったのは姉が強姦される場面を見たときであるが、「強姦」という概念がない男には助けが必要であることも感じとれず、ただ姉の下半身を見ているだけであった。ある時男は姉に性交を求め、それを見た父親に追いかける。しかし男には禁止の言葉は聞こえず、なぜ父親が怒っているのかわからない。家族ともコミュニケーションをほとんどとらず「独り」で生きてきた男にとって、行為への意味づけは自分でするものであり、男は社会的意味から遠いとこ

ろにしているのである。

朝乃にとって性交は、異性間で行われる「正常」な行為であった。「自然」と従ってしまうほど、異性愛主義は深く根付いている。だが男にとっては、人と関わる手段である。それを人と親しくなる行為だと認識していても何の不思議もない。性交について全く違う認識をしている二人が、性交を通して交差した。二人は性交を通して全く別のものを見ているが、性交そのものは容易に行われる。お互いの意識が全く食い違っていたとしても性交は行えてしまい、それが容易であることは、異性愛主義を中心とし性交を異性愛的欲動であるとする必然性を問題として表出する。性交が「自然」であることなど何もないのである。

## 高橋たか子「人形愛」 ——「私」の「性愛」について——

宮田絵里

本報告では高橋たか子の短編小説「人形愛」（『群像』, 1976年）を取り上げ、「うつくしい少年」の姿をした蠟人形を愛撫する主人公「私」の「性愛」について考察した。「人形愛」は中年女性の「私」が夢の中で「うつくしい少年」の姿をした「蠟人形」を愛撫し、同時に現実にいるその「蠟人形」そっくりな少年が夢の影響を受けるかのように人形めいていく、そうした「私」と「蠟人形」、「少年」との、「私」が言うところの「性愛」が描かれた幻想的な作品である。この小説の中で「蠟人形」、そして「少年」は徹底的に「客体」として描かれることから、これは「自己愛」の物語であると解釈されてきた。例えば水田宗子は「現実と夢の境界をあいまいなものにして、愛や性の対象を自己の幻想の産物の中に求めてきた」高橋の作品の一つに「人形愛」を挙げ、現実で自己成就ができない女性が「夢の中」、つまり自己の内部に対象を見出そうとする試みがここでは描かれているが、それは不毛な「性愛」であると指摘している。（『絶対的な他者を求める不毛な自我の円環——高橋たか子の罪と夢』, 『高橋たか子の風景』, 中川成美・長谷川啓編, 彩流社, 1999年12月）

「人形愛」とは「ピグマリオンズム」を澁澤龍彦が訳した言葉である。精神分析でも「人形」や「偶像」への愛は「自我」の問題とされてきたが、「ピグマリオン・コンプレックス」に象徴的なように、「人形」の表象が女性ジェンダーと深く結びついていることを考えると、高橋の「人形愛」はこれまでの「人形愛」物語の系譜における、男／女の権力関係を逆転させた話として読むことも可能だろう。しかしあくまで「人形愛」を「異性愛」関係の中でのみとらえたとき、それは水田の指摘する不毛な「性愛」となってしまうのではないだろうか。「私」の「性愛」は「不毛」なのだろうか。この解釈の読み替えをするのが本発表の目的であった。

千野帽子は「人形愛」には「触る主体である女」と「触られる客体（オブジェ）である少年」との「性的だが非性的な接触が描かれて」と指摘している。（『活字の国のピグマリオン—少年王・澁澤龍彦, 少女たちに篡奪される』「ユリイカ」, 青土社, 2005年5月）また、三枝和子は同時代評においてこの「性愛」を「異性でありながら男ではない少年を、年とった女が徹底的に支配する」という「第三の性愛」だと述べた。（『観念の極みのエロティシズム——第三の性愛 高橋たか子『人形愛』, 「すばる」, 集英社, 1978年12月）この指摘をふまえ、「私」の「蠟人形」への愛撫を一つの「性／交」としてとらえ、かつそれが「異性愛」の枠組みにはおさまらないということ考察した。

「異性愛」の「性／交」とは男性と女性の「性器」を中心におこなわれる。しかし「蠟人形」の「性」は通常男性／女性にはおさまらないものとして描かれている。「蠟人形」の身体は女性的なものとして描かれ、性器は植物となり、「性／交」には関係しない。「私」は「指先」で「蠟人形」をまさぐることによって快樂を得ているのである。

「私」は夢の中で「蠟人形」を「触覚そのもの」となって愛撫する。それは「器官」の一つ一つの形を触ってたしかめることであり、「器官を一つ一つ、手のなかに丸めこみ、何度も揉みほぐすようにし、手の温みを染みこませ、それを繰り返して繰り返している」と、玉男の内部に隠されていた命が徐々に徐々に目醒めてくる」ことなのだ。この「命」とは「私」にいわせれば「エロス」であり、この愛撫の時、「私」は「主体」そのものでいられるというが、「私」は「蠟人形」に触れると同時に触れられていることに注目したい。「触覚そのもの」となった「私」は「蠟人形」に触れていることによって「私」を知覚しているともいえ、「私」は夢の中で「蠟人形」に触れるその時に「主体」たる「私」を知覚しており、主体／客体という関係性は曖昧になる。愛撫の瞬間、「私」と「蠟人形」の境界は実は曖昧になっており、ここで「私」と「蠟人形」は文字通り「性的に交わっている」のではないだろうか。性器的でない、男／女の異性間関係でもない「性／交」というものがここで提示されているのである。

## 安部公房「飢えた皮膚」 ——飢える身体の変遷と変色——

岩本知恵

安部公房「飢えた皮膚」（『文学界』1951年10月）は、極限的な飢餓状態にある「おれ」が、資本家の夫人である「女」を騙して阿片中毒にし、財産を奪うことで復讐をする物語である。この復讐には重要な要素として「女」と「性交」すること（レイプすること）が含みこまれている。単純に考えればレイプとしての「性交」が暴力として機能することは自明であるが、しかし、描写される「性交」と「おれ」の欲望は、服を剥ぎ取ること、裸にすること、かつ「保護色病」という架空の病気によって皮膚を変色させることに焦点化されている。一番の目的は「性交」やレイプそのものではないかのように思われるのだ。むしろ「おれ」の行動や欲望は「復讐」という言葉の印象とは別のところにあるのではないだろうか。本発表は、「復讐」という言葉の印象を保留し、「復讐」の裏に、「おれ」の欲望を読み取る試みであった。

さて、前述のとおり「おれ」の「性交」は服を剥ぎ取ること、裸にすること、かつ「保護色病」という架空の病気によって皮膚を変色させることに焦点化されていた。「おれ」が剥ぎ取ることを望んでやまない服は、皮膚の延長であり不備を補うものであると同時に、自己の社会性や階級性を示すものとして位置づけられている。また、皮膚が内と外を振り分ける身体境界である以上、皮膚はそもそも身体境界やアイデンティティを作り出すものとして考えられる。皮膚は、外部を外部として棄却することによって、内部たる自己を首尾一貫したものとして確立するのである。ならば「おれ」の欲望は、衣装や皮膚によって付与されるアイデンティティを剥ぎ取る行為であると捉えることができるのではないだろうか。

しかし、単に衣装／皮膚を剥ぎ取っただけでは、その内側に「真の自己」や「正しいアイデンティティ」を想定することになりかねない。こうした「真の自己」の想定危険性は、この作品では「飢え」という、自己表象にかかわる欲望の変化によって巧妙に回避されている。

作中ではあらゆる欲望が「飢え」という言葉で表現されるのだが、この「飢え」は解消されるごとにまた新しい「飢え」を見つけていく。当初単なる食欲であった「飢え」はレトリックによって性欲や支配欲、権力に対する欲求へと置換されてゆく。欲望がそれ自体名づけられない欠如として存在しているものであり、言語化しなければ満たすことのできないものであるならば、ここで「おれ」が行っているのは言語化による欲望の置換に他ならない。「おれ」は言語化することで「飢え」を満たしていく。しかし、復讐を完了した後はとうとう欲望を比喩によっても言語化できなくなってしまうのである。この結末部において、「おれ」の皮膚は緑色に変色してしまう。この緑色化は、言語化できない「飢え」に、今度は言葉ではなく身体がひずみを訴え続けているような描写である。

実はここで「おれ」に、「女」との「性交」において反復したプロセスが、意図せず戻ってきている。「おれ」は「女」に阿片を与えないことで禁断症状を作り出し、「女」は禁断症状とい

う「飢え」の感覚を変色しそうな感覚として表現した。「おれ」は言葉にできない「飢え」を、「女」との「性交」で繰り返し、そして繰り返された言葉に倣って身体に表しているのである。

このように、言葉と身体感覚が絡まり合い互いにずれていくことで、欲望は形態を変え続けながら持続していく。「おれ」にとって「性交」は、こうした欲望の変遷を偶発性にひらきつつ、自己を変容させ続けるプロセスとなり得たのではないだろうか。

